

第12回

春日井市交響楽団定期演奏会

Kasugai City Philharmonic Orchestra



2003年7月6日(日)

15:00開演 / 14:00開場

ごあいさつ



ごあいさつ

春日井市交響楽団
名誉会長

春日井市長
鵜飼 一郎

いよいよ夏本番が近づき、日毎に暑さが増して涼風の恋しい季節となりました。

今日は、第12回春日井市交響楽団定期演奏会にご来場いただき、まことにありがとうございます。日頃の練習の成果を披露できる場として、毎年この時期に定期演奏会を開催できますことは、関係各位および市民の皆様方の温かいご支援があったのことに深く感謝申し上げます。

今回は、団員の原沙登子さんがヴァイオリン独奏を務めるとお聞きしております。名古屋近郊をはじめ各地でご活躍の吉住典洋氏による指揮のもと、温かみのある弦と管の響きが会場に広がり、お集まりいただいた皆様を大いに魅了するとともに、市制施行60周年を迎えた本市にとりましても記念すべき演奏会になるものと期待しております。

文化のまちづくりの主役は市民の皆様一人ひとりとこの基本に立ち、県下におきましていち早く制定いたしました「文化振興基本条例」を核として、今後もさまざまな施策を進めてまいりますので、本楽団共々、さらなるご支援ご協力をお願い申し上げます。

それでは、春日井市交響楽団の演奏で今日のこのひとときを存分にお楽しみください。



ごあいさつ

春日井市交響楽団
会長

三浦 昌夫

今日は、第12回春日井市交響楽団定期演奏会へおいでいただきありがとうございます。

毎年この時期に、私たち春日井市交響楽団は、春日井市民のみなさまにクラシック音楽の名曲を名演奏でお聴きいただこうと定期演奏会を開いています。

ただ、それが名曲であればあるほど、名演奏に向けて、私たちに無限の努力と才能と批判精神を要求します。

今回も、市民オーケストラである私たちの演奏は、間違いのない「完璧な名演奏」とは全く違ったものであるかも知れません。しかし、どんな音楽であれ、楽譜に書かれた音符が生命を与えられて音楽になるのは、「演奏」によります。そうであるならば、世界でもっとも新鮮で、生まれたばかりの若く躍動する生命をもち、現代人の批判に耐えた音楽は、これから数分後にみなさまがお聴きになる春日井市交響楽団の演奏に違いありません。名演奏の条件に、新鮮さと現代性はなくてはならぬものです。ヴァイオリン独奏は団員の原沙登子です。ここでも、原の努力と才能が問われるところですが、名演奏に果敢に立ち向かう原を、懸命に支える団員の友情もまた、お聴きいただきたい名演奏の一つです。

指揮者の吉住典洋さま、ご指導いただいたトレーナーの竹内雅一先生、竹本義明先生、神野玲子先生に心からお礼申し上げます。

それではごゆっくり、名曲の名演奏をお楽しみ下さい。

プログラム

Program

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト (1756-1791) 作曲

Wolfgang Amadeus Mozart

歌劇「フィガロの結婚」序曲 K V. 492

Die Hochzeit des Figaro K V. 492

— Ouverture zur Oper —

ヨハネス・ブラームス (1833-1897) 作曲

Johannes Brahms

ヴァイオリン協奏曲 二長調 作品77

Konzert für Violine und Orchester D-dur Op.77

第1楽章 アレグロ・ノン・トロツポ : Allegro non troppo

第2楽章 アダージョ : Adagio

第3楽章 アレグロ・ジョコーソ・マ・ノン・トロツポ・ヴィヴァーチェ
: Allegro giocoso, ma non troppo vivace

《休憩》 Intermission

ヨハネス・ブラームス (1833-1897) 作曲

Johannes Brahms

交響曲 第3番 へ長調 作品90

Symphonie Nr.3 F-dur Op.90

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ : Allegro con brio

第2楽章 アンダンテ : Andante

第3楽章 ポコ・アレグレット : Poco Allegretto

第4楽章 アレグロ : Allegro

プロフィール



指揮
吉住典洋

Norihiro Yoshizumi

愛媛県今治市生まれ。愛知県立芸術大学管打器楽コースを卒業、研究生を経て同大学大学院音楽研究科終了。サクソフォンを永岡嘉夫、雲井雅人、室内楽を菅原眸、中川良平、村田四郎、オーケストラ・レパートリーを中川良平の各氏に師事。同大学定期演奏会には、J.S.Bach/NakagawaのMarcello Concerto] BWV974 のソリストとしてソプラノ・サクソフォンを演奏、好評を博した。よんでん文化振興財団奨学金を受賞。在学中より指揮者としての活動を開始、名古屋二期会において外山雄三氏のもとでアシスタントとしての研鑽を積む。以後「中川良平のTokyo BACH-BAND」、日生劇場オペラ名古屋公演など。佐藤功太郎、古谷誠一、松尾葉子、竹本泰蔵、現田茂夫、沼尻竜典各氏のアシスタントを歴任する。またその間も自らのタクトでオーケストラや合唱など数々の音楽愛好団体と共演、1998年からはセントラル愛知交響楽団、2000年から名フィルユニオンコンサートに出演する。1999年、アシスタントとして入っていた名古屋市文化振興事業団主催「かるめん・じょーんず」(原作 G.Bizet:Carmen) の最終日公演において急遽指揮を命ぜられピット・デビュー、好評を博した。最近では春日井オペラ八百比丘尼物語初演を、アンサンブル・セルメールとStravinskyの兵士の物語を指揮するなど、意欲的な活動を見せている。

現在、愛知県立芸術大学、愛知県立明和高等学校音楽科各非常勤講師。

よしづみ語録

吉住先生は練習中、ミュージシャンシップというのをよく言われていました。オーケストラのチームワーク、一緒に音楽を作っていく信頼感をどのように築いていくかについて、様々な表現で説明して下さいました。その一部をご紹介します。(文責：宮田義郎(FI))

- ・楽譜通りに演奏するのではなく、楽譜に書いてあるように聴こえるように演奏してください。
- ・お互いの音が正しいバランスで聴こえるように守り合ってください。
- ・誰かの合図に合わせるよりも、自分でリズムを感じてください。
- ・テンポは皆さんの中にあるから、勘定するのではなく・・・
- ・音を出す前に「こういう音を出そう」というキャラクターを見せ合ってください。
- ・音を出す拍でなくその準備で息を合わせるんです。じゃん・けん・ポンの「けん」で勢いが決まれば、ポンは自然に出るでしょう。
- ・自分が息を吸ったときに相手も一緒に吸っているかを感じてください。
- ・田んぼの中を風が吹いて稲がなびくように、オーケストラ全体が動くようになると素晴らしいですね。



バイオリン独奏
原 沙登子

Satoko Hara

名古屋市立菊里高等学校 音楽科卒。
2002年 愛知県立芸術大学音楽学科学科器楽科卒。
フランス、クールシュベールのサマーセミナーにおいて、ローラン・コルシア、デヴィー・エルリー各氏のレッスンを受け、ディプロマ習得。これまでに、黒崎尚子、石田なをみ、森下陽子、岡山芳子、エヴァルド・ダネルの各氏に師事。

現在、春日井市交響楽団、小牧市交響楽団団員。

KAPOへの思いを語る

小6の夏に母の勧めでKAPO(春日井市交響楽団)に入団した頃は、楽譜を弾くのに精一杯でした。周りの皆がいろいろ助けてくれて、次第に弦と管のいろいろな楽器の組み合わせの面白さ、いろいろな解釈の人が集まって一つの曲を作っていることの不思議さ、指揮者によって引き出されるいろいろな可能性、といったオーケストラの魅力に引き込まれ、気づいたら今まで定期演奏会はフル出場していました。でも、コンチェルトを弾くなんて想像もしませんでした。

大学2年のときにコンマスになり、自分がひっぱっていく立場だけに、自分のパートを言われた通り弾くだけでなく、周りをしっかり聴く必要があり、いろいろ勉強になりました。弦のトップの人達と協力して、他のパートを考えつつ、ボーイングやフレーズ、弾き方を考えるのはやりがいがあります。そうやって長い時間かけてじっくり作り上げるだけに、本番の気持ちは最高で、自分達が音楽を作ったという達成感と、一体感を体験したのが印象に残っています。

このように自分が育ってきたKAPOでコンチェルトを弾いていると、仲間がバックで支えてくれ、アットホームで心強くと同時に厳しさも感じます。「仲間と一緒に音楽をやる楽しさ」を感じていただくと嬉しいですね。大曲だけに、オケを客観的に聴きながら、今自分が弾いているところを集中するようにして、自分の音楽を作っていけるようにしたいです。(インタヴュー：宮田義郎(FI))

曲目解説

— 音楽の南半球と北半球 —

春日井市交響楽団音楽監督 都築正道(中部大学教授)

歌劇《フィガロの結婚》序曲

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756-1791)
作曲

若者オペラの序曲 歌劇《フィガロの結婚》は、モーツァルトがちょうど30歳の1786年に作曲して、ウィーンの宮廷劇場で初演した奇跡のような作品です。序曲は、「プレスト・ニ長調・4/4拍子・パル形式」の内容をもちます。ここでは、速度記号「プレスト」(きわめて早く)が問題です。「いくら速く演奏しても速すぎることのない三大序曲」と私が勝手に決めている三つの序曲があります。それは、ロシアの作曲家グリンカの歌劇《リュスランとリュドミラ》(1842)と、ボヘミアの作曲家スメタナの歌劇《売られた花嫁》(1866)と、この《フィガロの結婚》の序曲です。初演の前夜、モーツァルトが、「もっと速く、もっと速く」とオーケストラに最高のテンポを要求して練習を終え、「ではみなさん、明日の本番はもっと速く奏いて下さい」といった話は有名です。でも、これはプロのお話。私たちアマチュアのオーケストラでは、この序曲は大変な難曲です。すごく速いので同じ速度で最後まで奏ききれないと、他のパートと合わないのと、軽やかなイタリア風の弦さばきができないのと、ロココ風のエロティシズムが表現できないからです。

この序曲がどうしてこんなに速くなければならないかといえば、ロビンズ・ランドンがいうように、「フィガロの結婚」が「若者オペラ」だからです。青春の早急さでもって、オペラ全体が、とても速いテンポでどんどん進められていきます。序曲はその若さを象徴するものでなければなりません。イタリア・オペラの定石でいけば「急-緩-急」の三部形式であるはずですが、成功にはやる若者モーツァルトですから、先を急ぐ余り、ゆっくりした展開部や中間部に用はないのです。

ヴァイオリン協奏曲

ヨハンネス・ブラームス(1833-1897) 作曲

ソリストの本音 ブラームスのヴァイオリン協奏曲は大曲中の大曲で、一生に一度はやりたいと思っていました。バガニーニやサンサーンスのように技巧的な華やかさというよりは、奥深さがあり、暗い陰もあります。弾きがいがあるのは冒頭ですね、全曲のエネルギーがここにかかっているような、ヴァイオリンの出だしのすごいエネルギー。そこからテーマの対照的に特有の美しい繊細さに持っていくところが技術的にも難しいです。カデンツァは技術を見

せつつテーマを活かして弾きたいですね。2楽章は繊細できれいな中にふっと暗さがよぎる曲で、ただ歌うだけでなく、過去の懐かしさ、そこからよみがえるエネルギーのようなものを表現したいです。3楽章はスケールが大きく、華やかというより、ヴォリュームがありどっしりと重い、独特な派手さがあります。そして、男性的の中にほろっと女性的な繊細さ、やさしさがのぞくところが魅力で、色が変わるところが好きです。でも、オケの迫力がすごいので負けそうになりますが、1、2楽章はオケが作ってくれた音楽に自分が入っていく感じなのに対し、3楽章は頭から自分で音楽を作るので、弾きやすい反面、怖いですね。— というのは、本日のソリストをつとめる原沙登子の言葉です。

ヴァイオリン協奏曲の高い嶺 さて、そのブラームスの《ヴァイオリン協奏曲》ですが、自分のことではなにごとも慎重なブラームス(1833-1897)は、46歳(1879年)になって初めて書き上げます。1877年秋に、ヴァイオリニストのサラサーテの演奏を聴いて、協奏曲を書こうと思いました。完成され、初演されたのは翌々年の元旦でした。名作揃いの彼の作品にあっても、最高の円熟度を示すものです。彼のただ一つのヴァイオリン協奏曲ですが、屈指の名曲で、ベートーヴェンとメンデルスゾーンとチャイコフスキーの作品とならぶ「4大ヴァイオリン協奏曲」の一つです。この年にブラームスは、永年の念願であったイタリア旅行に出かけました。わずか1月間の小旅行でしたが、好きなイタリア美術に接し、充分満足してお気に入りの避暑地であるペルチャッハへ帰ってきました。帰国後直ぐに作曲されたこの協奏曲には、イタリア芸術との表面的な関係はなんら認められません。「古典的な完成美」を正しいとする伝統主義の美学が全体を支配しているのは事実です。ブラームスの友人で、彼に技術的なアドヴァイスを与えた名ヴァイオリニストのヨアヒムに捧げられています。後期ロマン派のヴァイオリン協奏曲の歴史は、ヴィエニャフスキ(1862年)から、ブルッフの「第1番」(1866年)、ラローの《スペイン交響曲》(1873年)、ブラームス(1879年)、サン＝サーンスの「第3番」(1881年)、チャイコフスキー(1881年)、ドヴォルザーク(1883年)へと音楽史の高い嶺を流れていきます。

第1楽章：(快速に、早すぎないように)
ニ長調・3/4拍子・ソナタ形式。

大らかな広がりをもった雄大な気分が始まります。ベートーヴェンの「ヴァイオリン協奏曲」(1806年)と同じニ長調ですが、同時期にペルチャッハで作られていた彼の「田園交響曲」である「交響曲第2番」